

IV. ユニット研究会

ユニット1（南アジア地域班）研究会

2012 年度 第1回 ユニット1（南アジア地域班）研究会

- 報告題目：チッタゴン丘陵地帯におけるパリッタ儀礼の報告
- 開催日時：2012 年 5 月 26 日（土）16：30～17：00
- 場所：龍谷大学大宮学舎清和館 3 階ホール
- 報告者：亀山健志（2011 年度 BARC 公募研究員、至学館大学人文学部非常勤講師）
- コメンテーター：ディリップ・クマル・バルア（バングラデシュ国立ダッカ大学人文学部
パーリ学仏教学科長・教授）
- 参加者：46 人

【報告のポイント】

報告者が BARC の研究助成を受けて行った、バングラデシュのチッタゴン丘陵地帯におけるパリッタ儀礼に関する調査の結果が、多くの貴重な映像を交えて報告された。2011 年の 12 月から翌年の 1 月にかけて行われた調査によって、チャクマ族、マルマ族、ラカイン族、タンチェンガ族それぞれのパリッタ儀礼が明らかとなり、現代の上座仏教が持つ存在形態の一端が学会に報告された。

【報告の概要】

現代のバングラデシュにおけるチッタゴン丘陵地帯では、バルア族、チャクマ族、マルマ族、ラカイン族、タンチェンガ族などの山岳少数民族が上座仏教を信仰しており、それぞれが独自の仏教文化を形成しているとされる。

報告者は BARC の研究助成を受け、2011 年 12 月から 2012 年 1 月にかけてチッタゴン丘陵地帯全般の現地調査を行い、政治的な理由で入城が困難なカグラチャリ、ディギナラをはじめ、ランガマティ、バンドルバンなどの諸地域において多くの仏教寺院を訪れ、そこで行われている儀礼を調査し、その様子を撮影した。本研究会では、その調査で報告者が知り得た儀礼の一つであるパリッタ儀礼、つまり日常的に行われるパリッタ経文を読誦する儀礼に焦点を合わせ、チャクマ族、マルマ族、ラカイン族、タンチェンガ族それぞれのパリッタ儀礼が、現地で撮影された映像を用いて具体的に紹介された。

パリッタ儀礼は現在の上座仏教において日常的に行われ、その目的は無病息災や仕事の成就、旅の安全祈願など、様々な用途に用いられている。その起源は古く、紀元前 1 世紀頃に成立したとされる『ミリンダパンハー』には、『ラタナスutta』などの 6 つがパリッタとして取り上げられている。現代の上座仏教は「パリッタ仏教」という側面を持ち、パリ

ッタという一種の呪文を唱える事で一般信者の需要に答えている。パリッタはパーリ聖典の中から抽出されたものであり、現在どの上座仏教国においてもパーリ語で読まれている。

チッタゴン丘陵地帯のそれぞれの民族のパリッタ儀礼を比較して伺えることは、どの部族の儀礼も特別な構造を持っている訳ではなく、他の上座仏教諸国の事例と同様に現代上座仏教の儀礼の様相がよく保持されている、という点である。ただ、マルマ族とラカイン族の儀礼に関していえば、その発音が特殊であるために、印象が全く異なっていた。しかし、読まれているテキストを精査すると、他の儀礼と大きな違いはないことが分かった。さらに、そのマルマ族とラカイン族は、読誦スピードが早いため、同じ時間の儀礼であってもより多くのテキストが読まれていることが判明した。タイのパリッタ儀礼と異なっている部分は、各パリッタの説明の部分がどの儀礼でも読まれていたことである。特に、『マンガラスッタ』の説明部分はテキスト自体がタイのそれと異なっていた。

このように、報告者は調査が困難な地域の儀礼を紹介するとともに、それらの儀礼に対して文献学的な分析を施し、現代の上座仏教が持つ存在形態の一端を明らかにした。今回の研究調査の当初の目的では、ダッカから南下して国境を超えアラカン地方を目指す予定だったが、政治的にも日程的にも不可能だったので、今回はミャンマー国内からアラカン地方を目指して調査を行いたいと、今後の抱負を述べた。

【議論の概要】

バルア氏は、入域が困難で、時には命に関わるリスクを背負わなければならない地域での実態調査の成果を高く評価するとともに、パリッタ儀礼に関する多くのデータが収集されたことは、学会への大きな寄与であるとコメントした。また同氏からは、チッタゴン丘陵地帯のパリッタ儀礼の特徴が問われ、報告者からは、当然のことかもしれないがミャンマーの国境に近づくにつれ、ミャンマーの儀礼の影響が濃くなっていくのが特徴であるとの回答がなされた。



〰〰〰〰〰〰

2012 年度 第 2 回 ユニット 1 (南アジア地域班) 研究会

(第 1 回ワークショップ: バングラデシュ・チッタゴン山岳地帯の仏教徒コミュニティ)

■報告者・報告題目

ディリップ・クマル・バルア (バングラデシュ国立ダッカ大学人文学部パーリ学仏教学科長・教授)

「チッタゴン山岳地帯 (CHT) における少数民族仏教徒: その起源と生活」

亀山健志 (2011 年度 BARC 公募研究員・至学館大学人文学部非常勤講師)

「現代上座仏教の儀礼にかんして: バングラデシュ CHT 地域での調査と報告」

■開催日時: 2012 年 5 月 29 日 (火) 15:00~16:30

■場所: 龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室

■コメンテーター: 岡本健資 (龍谷大学政策学部講師)

■参加者: 30 人

【報告のポイント】

政治的な理由から入域の困難なバングラデシュのチッタゴン山岳地帯 (Chittagong Hill Tracts = CHT) に存在する、仏教徒コミュニティに関する現地調査の報告がなされた。まず、バングラデシュの仏教史とその中で CHT 地域の少数民族の占める位置について説明がなされ、続いて、2011 年 12 月に報告者両名が現地調査の際に撮影した上座仏教儀礼の映像資料が紹介された。

【報告の概要】

まずバルア氏は、バングラデシュの地理的な位置や環境を紹介し、同国の仏教の歴史を概観した。同国とインド・西ベンガル州を合わせたベンガル地方には、グプタ朝の時代には法顕が、またヴァルダナ朝の時代には玄奘が来訪し、当時、仏教が盛んに信仰されていたことを書き記している。また 8 世紀から 11 世紀にかけて作られた仏教遺跡が今もバングラデシュには多く残されており、当時の仏教の隆盛が伺える遺跡の画像がスライドで映し出された。また、13 世紀の仏教排斥の動きにより、ほとんどの仏教寺院が破壊され僧侶が殺害されたことや、その迫害を逃れた仏教徒が CHT やネパールに避難し、その地域が今日に至るまで仏教徒の居住区となっており、また、1580 年から 1666 年まで、CHT はアラカン王朝の支配下におかれていたことなどが説明された。

現代のバングラデシュについて言えば、イスラーム教徒が全人口約 1 億 5 千人のおよそ 9 割を占め、次いでヒンドゥー教徒が約 1 割である。仏教徒はキリスト教徒と同様、1 パーセントに満たないが、バングラデシュの仏教は多様性に富む。バルア氏は、CHT における仏教が個人単位ではなく民族単位で信仰されており、しかも民族ごとに信仰形態を異にすることを明らかにした。さらに、同国仏教徒の中でも比較的人口の多いバルア族・チャクマ族を取り上げ、その起源と現在の居住地域、そして、彼らの信仰の特徴を、現地調査に基づく映像資料を用いて詳しく紹介した。

続いて、亀山氏は、BARC の研究助成により実施した、2011 年 12 月 19 日から 2012 年 1 月 11 日にわたる CHT 調査の報告を行った。現代の上座仏教の存在形態を明確にすることを目的とするこの調査は、ダッカ大学をはじめとする関係諸機関の協力の下、バングラデシュ・インド・ミャンマーが国境を接する政治的に入域困難とされる CHT 地域に入り、そこにお



ける仏教徒や寺院の実際を記録する、というものであった。具体的には、チャクマ、マルマ、バルアなどの各民族が信仰する上座仏教の現状を、出家者と在家者からの聴取調査や各種仏教儀礼の映像記録を通して把握することが行われた。報告では、チャクマ、マルマ、タンチェンガ、そしてラカインという各民族のパリッタ儀礼の映像が上映され、それぞれの民族の儀礼上の差異が示された。特に、音声を含んだ映像は、その旋律上の差異が、テキストの差異よりもはるかに大きいことを示し、画一的とされる上座仏教の中でも多様性が存在する可能性を指摘するものであった。

【議論の概要】

岡本氏は、まず、この調査報告によって、複雑な歴史を持つ現代バングラデシュの仏教徒の現状の一端が明らかにされたことは大変貴重であると述べた。次いで、現在のバングラデシュで勢力を伸張しつつある上座仏教は、英領インドの時代以降に盛んになった動きであり、タントラ仏教が盛んであったパーラ朝時代以降、ヒンドゥー教を奉ずる王朝やイスラーム勢力がベンガルを席卷することで衰微した仏教とは断絶があることを指摘した。その上で、岡本氏は、現在、バングラデシュで盛んに行われる上座仏教のパリッタ儀礼が、タントラ仏教やヒンドゥー教の呪術的な儀礼や習慣を吸収する受け皿となっている可能性について問い、バルア氏もその可能性については考慮する余地があると回答した。



2012 年度 第 3 回 ユニット 1（南アジア地域班）研究会

- 報告題目：An Early Kadam (bka' gdams) Commentary on Atiśa's *Satyadvayāvatāra*
- 開催日時：2012 年 6 月 18 日（月）10：45～12：15
- 場所：龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室
- 報告者：James B. APPLE（University of Calgary, Associate Professor）
- コメンテーター：若原雄昭（龍谷大学文学部教授）
- 参加者：23 人

【報告のポイント】

アティシャの『入二諦論』に対するこれまで知られていなかった注釈書が、カダム全集の中から紹介され、また、チベットにおける初期中観哲学の内実が論じられた。報告者は、アティシャを信奉する初期カダム派が展開した二諦説のうち、特に「世俗諦」にスポットを当て、彼らの二諦説ひいては中観哲学が、後期ゲルク派の哲学的立場と一致しないことを示した。

【報告の概要】

11 世紀前半、インドから招かれたアティシャことディーパンカラシュリージュニャーナ(982-1054)が、チベットの仏教文化に大きな足跡を残したことはよく知られている。かれの代表的な著書の一つに『入二諦論 *Satyadvayāvatāra*』がある。この書物は Chr. リントナー氏や江島恵教氏によって翻訳がなされ、研究も積み重ねられているが、これまでにこの『入二諦論』の注釈書の存在は確認されていなかった。

今回、報告者によって見いだされた『入二諦論』の注釈書はカダム全集の中に含まれており、その全集には 10 世紀後半から 15 世紀前半にチベット人によって記された、中観や論理学やアビダルマに関する著作が収められていることが知られている。なお、カダム全集は、2003 年にラサ郊外のデブン僧院とセラ僧院の内部から回収された写本を含んでおり、90 巻を超える分量を誇っている。

本報告では『入二諦論』の新出の注釈書の内容が紹介されると共に、その注釈書を通じて、チベットにおける初期中観哲学の内実が論じられた。その『入二諦論』の注釈は、アティシャを信奉する 11 世紀後半あるいは 12 世紀前半のカダム派の後継者たちが、仏教の教義、正しい認識根拠 (*tshad ma, pramāṇa*) などをつかむに理解したのかが伺える貴重な資料である。報告では主に、「正しい世俗」諦 (*yang dag pa'i kun rdzob bden pa*) と「唯の世俗」(*kun rdzob tsam*) 諦とといった区分を持つ世俗諦に関する、初期カダム派の理解を追った。

更に、初期カダム派の二諦説と中観哲学の理解が、どのような点で後期ゲルク派の哲学的立場と相違するのかが検討された。結論として、アティシャの『入二諦論』に対する初期カダム派の注釈書は、チベットにおける学術研究の萌芽に関する文献的証拠と、中観思想形成に対する初期の展望を与えていることが指摘された。

【議論の概要】

若原氏からは、多くの資料が用いられた有意義な報告であったことが評価され、アティシャの所属部派、また彼の用いる論理学に関するコメントがなされた。またフロアからは、資料として当日配布されたテキストの翻訳に関して、別の翻訳案が提示され、新出の資料に対する高い関心が伺われた。



2012 年度 第 4 回 ユニット 1（南アジア地域班）研究会

- 報告題目：A Short History of the Word “satya / sacca” in the Post-Vedic Period
- 開催日時：2012 年 7 月 3 日（火）15：00～16：30
- 場所：龍谷大学大宮学舎清風館 3 階共同研究室 1
- 報告者：荒牧典俊（京都大学名誉教授）
- コメンテーター：桂 紹隆（龍谷大学文学部教授、BARC センター長）
- 参加者：27 人

【報告のポイント】

「真理、真実、事実」とよく訳されるサンスクリット語「satya」あるいはパーリ語「sacca」は、インド思想史を考察する上で重要な位置を占めることが報告者によって提起され、バラモン教の祭式主義とウパニシャッド運動、また、ウパニシャッドの思想と仏教の関係を、「satya/sacca」という語を介して理解する試みがなされた。

【報告の概要】

報告者はまず、インドにおいて多くの思弁的考察がなされたウパニシャッド運動を、バラモン教の墮落に対する反動として捉え、バラモン教の祭式主義が千年もの長い期間続いた結果として儀礼の形骸化が起こり、それに対して新たな運動が起こったのではないかと提起がなされた。

当時、長期にわたって伝承されたバラモン教に意味を見いだせなくなった者が、儀礼の形骸化によってエネルギーをなくしていたバラモン教に対抗するものとしての「アートマン」、つまり「息をする、生きる」ということを直接的に示す概念を求めて立ち上がったのであり、それが今日にも残るウパニシャッド文献に垣間みられるエネルギー的な思想として結実したのではないかと主張が、報告者によって多くの資料を用いてなされた。特に、ウパニシャッド運動における言わばヴェーダ祭式の個人化・内面化は、アグニチャヤナ祭に看取されることが示され、またヴェーダにおいては共同体のあり方が問われているのに対して、ウパニシャッドでは個人が主題となっていることも、ウパニシャッドにおけるヴェーダ祭式の内面化の証拠であることが示された。

さらに、ウパニシャッド運動とは、ヴェーダ祭式の本質を求めて森の中へ行った者の運動であり、彼らは瞑想している自分自身の根底にヴェーダの根本真理を求めていたのではないかと洞察がなされた。このウパニシャッド運動は一種の出家運動であるということもできるが、しかしこれはあくまで一時的な出家であり、その出家という行為を徹底させたのがジャイナ教の開祖ジナであり、またブッダである。彼らは徹底した出家主義の立場をとったと考えることができ、そこにウパニシャッド運動との差異があるのではないかと指摘がなされた。

また、ウパニシャッド運動を担ったものたちにとって、家庭での儀礼であり、バラモンアイデンティティであるアグニ・ホートラを森においてどのようにして行うかが問題であり、それを説明するのがプラーナ・アグニ・ホートラの実践であり、プラーナはアートマンと同義で、プラーナ・アグニ・ホートラの実践が法 (dharma) であり satya であると考えていたことが説明された。



【議論の概要】

桂氏からは、荒牧氏が遠慮がちに主張する、ウパニシャッド運動をヴェーダの祭式の伝統の墮落に対する反動として捉えることは、学会に広く認められていると考えてよいのではというコメントがなされた。さらに、反祭式運動であるウパニシャッド運動がありながら、なぜ仏教やジャイナ教という別の潮流が生まれ、バラモン教を批判したのかが桂氏から問われ、それは「殺生」を受け入れるかどうかの相違に起因する可能性のあることが荒牧氏からコメントされた。また、仏教とジャイナ教は共に「不殺生」を標榜するが、植物を「生き物」と考えるのか等の考え方の相違があるとの指摘が荒牧氏よりなされ、それが両宗教の大きな違いとなっていることが示唆された。桂氏からはさらに、「業 (karman)」の源流がバラモン教に求められるのかという質問がなされ、荒牧氏からはウパニシャッドの五火二道説に「業」の発想が認められることから、「業」思想はバラモン教に見いだされると言ってよいのではとの回答がなされた。



2012 年度 第 5 回 ユニット 1 (南アジア地域班) 研究会

■報告題目：後期中観派の二諦説概観

——Jñānagarbha の *Satyadvayavibhāṅga* における「顕現」と「論理」を中心に

■開催日時：2012 年 7 月 9 日 (月) 15 : 00 ~ 16 : 30

■場所：龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室

■報告者：赤羽律 (オーストリア科学アカデミー アジア文化・思想史研究所研究員)

■コメンテーター：西山 亮 (BARC リサーチアシスタント)

■参加者：29 人

【報告のポイント】

インドにおいて紀元後 8 世紀に活躍したジュニャーナガルバ (Jñānagarbha) の主著であ

る『二諦分別論』(Satyadvayavibhaṅga)を中心にして、後期中観派における二諦説が概観された。特に、二諦説のうちの世俗諦については「顕現」に、勝義諦については「論理」にスポットが当てられ、多くの資料を用いての詳細な検討がなされた。

【報告の概要】

ナーガールジュナ(Nāgārjuna)を源泉とするインド仏教の一つの思想潮流である中観派において、今回の報告で焦点が当てられた二諦説は、中観派の旗印とも言える「空」を説明する根本原理である。二諦説についてはこれまで多くの研究が積み重ねられてきたが、後期中観派の初期に位置づけられるジュニャーナガルバの二諦説に関しては、その主著『二諦分別論』自体の難解さも手伝ってあまり研究が進んでいないのが現状である。報告者はその『二諦分別論』を主な研究対象として多くの論考を重ねてきた研究者の一人であり、今回の報告では、『二諦分別論』に説かれているジュニャーナガルバの二諦説が包括的に提示された。

ジュニャーナガルバの二諦説のうち、まず世俗諦において鍵となるのは「顕現」である。ジュニャーナガルバは世俗の定義の一つに「顕現するがままのもの」という要素を挙げており、この「顕現するがまま」を特徴とするものは、考察対象とはならず、ただそのままのものとして認めるべきものであり、仮に考察するならば問題が生じる、とジュニャーナガルバは述べる。この「顕現しているがままのものは、ただそのまま認めればよい」という世俗における考え方は、「厳密な検討が加えられない限り喜ばしいもの」(*avicāraikaramaṇīya)という表現をとって、ジュニャーナガルバ以降の中観派の論師であるシャーンタラクシタやカマラシーラに引き継がれる。また、ジュニャーナガルバの主張する世俗諦においては、基本的に教義的な問題は関与していない、という指摘も報告者によってなされた。

ジュニャーナガルバの勝義に関しては、「論理」の位置づけに特徴的な理解が見られる。勝義が無戯論・不可言説であるとしても、言葉によって教示されなければ、その内容を知ることが不可能である。そこで要請されるのが「論理」であり、勝義と相応するその「論理」もまた勝義であるとされる。ただし、「論理」は無戯論の勝義ではないので、言わば二義的な勝義であることは注意を要する点である。

以上の内容を中心にジュニャーナガルバの二諦説を概観した後、報告者によって、後期中観派の二諦説は基本的にジュニャーナガルバの説を大きく逸脱せず、ジュニャーナガルバが後期中観派の二諦説の最終的な枠組みを提示したと言えるのではないかと、との提起がなされた。また、勝義と世俗とはあくまで相対的な関係であり、そうした相対性を超えたものとして「真実」(tattva)があるのではないかと、という指摘がなされ、実際に『二諦分別論』の第11偈において「真実としては〔生起でも不生起でもないという〕不二である」という文言が見られることが提示された。これは、今後、ジュニャーナガルバだけでなく、あらゆる思想家の二諦説を考える上で検討すべき課題である。

【議論の概要】

西山氏からは、勝義と世俗とは別に真実を想定していたと考えるかに関して、ナーガールジュナの『中論頌』第24章においては、涅槃を勝義とは別のより高い段階に置いているように見える記述があることから、二諦とは別の究極的なものを立てる可能性があるとの肯定的なコメントがなされたが、一方で世俗を手段、勝義をその目的とするような解釈が別の



テキストに散見されることから、二諦とは別の何かがあるとは一概には言えないのではとの意見も出され、報告者からは文脈によって二諦説は複雑な様相を呈するので、その都度に注意が必要であるとのコメントがなされた。またフロアからは、ジュニャーナガルバの依拠する論理学の扱いに関するサジェスションがなされ、ダルマキールティの影響を考慮すべきであることが提起された。



2012 年度 第 6 回 ユニット 1（南アジア地域班）研究会

- 報告題目：古典インドの眞實 (satya)
- 開催日時：2012 年 7 月 10 日（火）15：00～16：30
- 場所：龍谷大学大宮学舎清風館 3 階共同研究室 1
- 報告者：原實（東京大学名誉教授）
- コメンテーター：長崎暢子（龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター研究フェロー、RINDAS センター長）
- 参加者：30 人

【報告のポイント】

『マハーバーラタ』に見られる「真実（サティヤ、satya）」という語に焦点が当てられ、インドにおいて「真実」やその「真実」のもつ力がどのように認識されていたかが提示された。「真実」が儀礼を行うことよりも大切であると考えられていたことや、「真実」のもつ力が死者を蘇らせ、また貞節を守るためにはたらくと考えられていたことが示された。

【報告の概要】

報告者は『マハーバーラタ (MBh.)』にみられる「真実（サティヤ、satya）」という語に

ついて検証した。「真実」が重要視されていたことの伺える例として、MBh.6.1.41-69 における「井戸を百基作るより、池を一面作る方がよい。池を百面作るより、祭式を一回行う方がよい。祭式を百回行うより、息子を一人産む方がよい。息子を百人産むより、真実を語る方がよい」という一節や、「馬を千頭用いて千回のアシュヴァメーダ祭を行うより、真実の方がよい」という文言が紹介された。このことから、儀式より、内面的に正しく生きることが推奨されていた様子が伺える。

MBh.3.78.5 では、「真実」をバラモンへの布施よりも重要な徳目とし、別の箇所では、天界へ向かうための四つの行為として、然るべき器（＝バラモン）への布施、優しい言葉を語るクリヤ・ヴァチャナ、真実、アヒンサーが挙げられている。この四つの項目はそれぞれを補強しあうので何れが最も重要かは決められていない。また、MBh.1.13.44 では、沐浴と真実を語ることが同列



に位置づけられている。また、真実が一番優れたダルマとされ、自然現象も真実によって起こり、太陽で地面が暖まることも真実に基づき、真実によってアグニが輝き、真実によって風が吹くとされる。また、ヴェーダを学習し、決まりを実践し、真実を語ることが人々を天界へ導く。

MBh.13.58.30-38 のヤヤーチ王の一節では、ヤヤーチは歳をとって天界へ行ったが、福德が尽きて天界から四人の息子の所へ堕ちてしまった。天界へ戻りたいヤヤーチのために四人の息子が「生命と五穀、幸福を捨てても真実にかけて天界へ戻りなさい」と唱えるサティヤ・クリヤを行うと、ヤヤーチは天界へ戻った。また、死者を蘇らせるのもサティヤ・クリヤの効能である。実際に「正義、ダルマを愛し、バラモンを尊敬する。真実にかけて蘇れ」と真実語（サティヤ・ヴァチャナ）を唱えると死んだ息子が息を吹き返したという一節が存在し、反対に、MBh.3.6.37-38 では貞淑なダマヤンティーが、悪い男から逃げるために「真実にかけて誘惑者の前から逃れられますように」と言うと誘惑者が死んでしまうという一節も見られる。

シビ王物語では、神々がナラ王の姿となり本物のナラ王と区別がつかなくなったとき、貞女がナラ王を見つけるために、かつて自分が嘘を言ったことがないということと、プンダリーカと言う盛大な祭式を百回行ったことを真実にかけて宣言した。この真実によって自分が愛するナラ王を見分けられるように祈ると、神々が神の印（デーヴァ・リング）をあらわし、汗をかかず、まばたきをせず、ほこりをかぶらず、地上におりないで立った。そのため、影があり、花輪がしおれ、汗をかき、瞬きをする人間であるナラ王を見つけることが出来た。貞女の悲痛な真実語で神々は悪戯をやめたのである。

同様の話は仏教の典籍である『ディヴィヤアヴァダーナ』にも見られる。キンナラ王の娘マノーハラーを愛したスダナ王子が試される話である。キンナラ王が、千人の娘に化けて王

子にこの中から本物の娘を見分けるように言った。王子は、「愛しているから、その真実にかけて、汝は直ちに一步前に出ろ」と詩節を唱えた。すると、それが真実語であったので本物の娘が一步前に進み出て、王子は千人の中から娘を見分けることができたのである。

以上のように、インドにおいて「真実」が力をもっていると考えられていたことが、数々のテキストの引用から明らかにされた。また、『マハーバーラタ』などのバラモン教やヒンドゥー教に関わるテキストと共に仏教の典籍である『ディヴィヤアヴァダーナ』の一節を紹介する事で、インドにおいては宗教を越えて「真実」に力があると認識されていた事が確認された。

【議論の概要】

長崎氏は、ヒンドゥー教と仏教など、インドにおいて宗教を越えて認められる「真実は力を有する」という考え方についてコメントを行った。すなわち、イギリスの支配に服従しない、という「サティヤグラハ」と名付けられる運動は、ガンディーなどが「イギリスの支配が「真実」ではなく、また、非暴力の中からこそ「真実」が溢れ、その中から「力」が湧き出てくる」と考えた故の主張ではないか、と長崎氏は指摘し、「サティヤグラハ」も「真実」を重視するインドの伝統思想の延長線上にある、という可能性に言及した。



2012 年度 第7回 ユニット1（南アジア地域班）研究会

- 報告題目：サティヤについて——「真実語」の視点から
- 開催日時：2012 年 10 月 1 日（月）10：45～12：15
- 場所：龍谷大学大宮学舎北翼 1 階 105 教室
- 報告者：若原雄昭（龍谷大学文学部教授）
- コメンテーター：西山 亮（BARC リサーチアシスタント）
- 参加者：8 人

【報告のポイント】

古代から現代にいたるインドの思想において重要な観念である「真実（サティヤ、satya）」が考察された。特に、「真実語（サティヤ・ヴァチャナ）」にスポットが当てられ、『マヌ法典』などの法典類における「真実と神判（ordeal）」の記述が報告された。

【報告の概要】

まず報告者は、風間喜代三氏の『ことばの生活詩：インド・ヨーロッパ文化の原像へ』（平凡社選書、1987 年）に沿いながら、広く「真実」に相当するインド・ヨーロッパ語を概観し、その中で、インドにおいて「真実」を意味する「サティヤ」がどのような言語的背景

を持つのかを紹介した。「それが真実だ」といえば、我々は発言の内容が事実と相違しないことであると考えてるが、「サティヤ」においては問題の事柄の実現に「真実」かどうかの判断の力点がある、という風間氏の指摘は「サティヤ」を理解する上で重要である。

また、「サティヤ」に対して積み重ねられてきた研究の中で重要なものを拾い上げ、長い歴史を有するサティヤの研究史が紹介された。様々な観点から考察が重ねられてきた「サティヤ」研究の中で、報告者は特に「真実語」を中心に、論考を積み重ねてきた。「真実」は精神のみならず物質的世界をも動かし得る驚異的な力であるとする特異な観念がインドにおいては古代から中世を通じて広く見いだされる。その「真実」とは、具体的にはことばに他ならず、語られた「真実」もしくは「真実」を語ることばには、ある抗し難い呪力が宿っていて即座に何らかの奇跡的效果を外界に引き起こすと信じられていた。「真実語、真実の言明」や「真実の（誓いの）実行」と呼ばれる「誓いと呪いの中間にある実に奇妙な風習」（H. Lüders）は、叙事詩やプラーナを初め、一般インド文学中にもしばしば登場するが、特に『ジャータカ（本生話）』に代表される仏教の説話文学にそのおびただしい例が見られることが知られている。

今回の報告で特に問題となったのは、ヒンドゥー法典類における「真実と神判」である。テキストとしては主に『マヌ法典』が精査された。その中で説かれるのは、先ず、法廷で証言する際に真実を語り虚偽を述べないという義務である。虚偽を語った者は、幾度生まれ変わっても否応なくヴァルナ神の縄によって強く縛られる。また、証人がおらず決着がつかない場合には、神判（śapatha / divya）に訴えることが認められている。例えば、被告に火を運ばせることが記されており、もしその者が真実を語っていれば、火はその者を焼かず潔白であることが証明されるという。このような「真実と神判」に関する記述は『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』や『アルタ・シャーストラ』にも見出され、広く古代インドに「真実と神判」に関する一定の見方があった可能性が指摘された。



【議論の概要】

西山氏からは、報告中に頻出した「satya」と「an-ṛta」の関係について質問がなされ、その回答として、「satya」の対義語として「an-ṛta」が用いられていることが確認され、しばしば「天則」と訳される「ṛta」が、「satya」に近い語感を有していることが指摘された。フロアからは、現代では想像し難い「神判」に関して、当時どのように受け止められていたのかが質問され、様々な可能性が指摘された。



2012 年度 第 8 回 ユニット 1（南アジア地域班）研究会

- 報告題目：Intellectual India: Reason, Identity, Dissent
- 開催日時：2012 年 10 月 15 日（月）17：00～19：00
- 場所：龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室
- 報告者：Jonardon GANERI (Professor in Philosophy, Department of Philosophy, University of Sussex)
- コメンテーター：長崎暢子（龍谷大学人間総研・研究フェロー / RINDAS センター長）
- 参加者：18 人

【報告のポイント】

インド人経済学者である Amartya Sen (1933-) の *The Argumentative Indian* (2005) に記されているアイディアを基盤として、アイデンティティに関するインド的な発想を回復する重要性が指摘された。また同時に、信仰を異にする者たちの間での公共的理由／理性（public reason）に関しても議論された。

【報告の概要】

今日、私たち一人一人がアイデンティティを選ぶ権利を有している。それは、近代社会において多様化する文化や宗教によって明らかにされている事実である。もはや「生まれ」によって与えられたアイデンティティだけを思い描くことはなく、今やアイデンティティは能動的に、熟慮の末、選んだ結果であると言えよう。では、アイデンティティを選択する際に、どのような材料が使用可能であろうか。本報告はその問いに関する考察であり、「アイデンティティとは理性の働きである」ということが議論の中心となった。アイデンティティとは、典型的でパラダイム的なケースから引き出された理性の訓練によって装われたものである、というのが報告者の主張であり、議論はインドの伝統から抽出した理論を用いて進められた。

本報告は 5 つのテーマに沿って展開された。（１）まず、公共的理由／理性の概念が取り上げられ、コンセンサスの理由づけに関して考察がなされた。コンセンサスが生まれるには、それに関与するすべての参加者が共通のバックグラウンドを持っている必要はなく、むしろ、それぞれの参加者の背景にある諸要素が、公共の協議に関する不可欠なツールとなる。（２）次に、理由づけの特有のモデルが取り上げられ、それは、インドの合理的な議論に広く見られることが指摘された。このモデルにおいては、典型的なケースがローカルな場面でも評価基準となり、そしてその評価基準は標準的な可能性を広め、一般化するのである。（３）以上 2 つのテーマに関連して強調されたのは、意見の相違の重要性である。ここでは、インドにおける議論の伝統の中で意見の相違を可能にしている、公共的で実践的な理由づけのモデルの特徴が示された。（４）さらに、インドの知的な歴史の中ですでに考えられてきた、アイデンティティに関する理性の位置づけが紹介された。「自我」と「道

徳的なアイデンティティ」に焦点があてられ、それらの歴史的な概念は、近代のアイデンティティに対して創造的に、また可能性をもって用いることが主張された。(5)最後に、理由づけとアイデンティティの形成に関する過去の諸文化が、いかにして近代の知性によって利用可能となるかが議論された。

インドの知的な過去によって利用可能となった諸資料に関する本報告は、一般的な現象のケース・スタディとして見られるべきであり、また、それぞれの特性やニュアンスに注意を払いつつ、アジアや西洋における別の知的文化の同様なケース・スタディが開始可能であり、また、開始されなければならないことが強調された。



【議論の概要】

長崎氏からは、インド文化のアイデンティティを最初に主張した一人として、ガーンディーが挙げられ、植民地時代から独立へと向かうインドにおいて、ガーンディーの果たした功績が紹介された。桂氏からは、Ganeri 氏の報告に対して、インドの議論において伝統的に重視されてきた「喩例(*dr̥ṣṭānta*)」の考察を深める必要性和、また議論に関する S. Toulmin (1922-2009) のアイデアとの類似性が指摘された。



2012 年度 第 9 回 ユニット 1 (南アジア地域班) 研究会

- 報告題目 : The Lost Age of Reason: Navya-nyāya and Indian Modernity
- 開催日時 : 2012 年 10 月 23 日 (火) 15 : 00~17 : 00
- 場所 : 龍谷大学大宮学舎清風館 3 階共同研究室 1
- 報告者 : Jonardon GANERI (Professor in Philosophy, Department of Philosophy, University of Sussex)
- コメンテーター : 桂 紹隆 (龍谷大学文学部教授、BARC センター長)
- 参加者 : 14 人

【報告のポイント】

「近代化」という現象は、ヨーロッパで始まり、それが他の文化圏に広がったのではなく、それぞれの文化圏で独立に起こってきた出来事であることが、インドを例に挙げて指摘された。その中で、17 世紀インドの近代化を担った Navya-nyāya に関する考察が深められた。

【報告の概要】

「近代化」という現象には二つのモデルが存在したと考えられる。第一のモデルは、Francis Bacon (1561-1626) や René Descartes (1596-1650) に始まるヨーロッパにおける思想運動であり、彼らは過去を否定し、新たな哲学を打ち立てようとしたと言える。第二のモデルは、過去の思想を否定することなく、それを継承する形で新たに思想を方向付けていく、というものである。インドにおいては、後者のモデルが採られた。

インドでは古くから論理学が盛んに考究され、特に、六派哲学の Nyāya 学派が中心となり精緻な理論が構築された。Nyāya-sūtra を根本とするその学説は、時に仏教徒との激しい論争を繰り広げながら精錬され、現代に至るまで継承されてきた。本報告においは、その Nyāya 学派から生じた潮流である Navya-nyāya が、いかにインドに近代性をもたらしたかが示された。

Navya-nyāya は、古典サンスクリット語を用いて、彼ら独自の非常に多くの術語を正確に定義づけた。記号論理学を思わせるその作業は、14 世紀前半に活躍した Gaṅgeśa 以降、活発に行われていった。Sheldon Pollock が“The Death of Sanskrit” (2001)の中で、Navya-nyāya は、これまでのスタイルを刷新し、厳密にただけで、内容的には古代からのテーマを考究し続けていると主張していることに対して、報告者は、内容も新たなものとなっていることを指摘した。その例として Navya-nyāya の担い手である Raghunātha Śīromaṇi (1460-1540) を取り上げ、彼の思想を精査した。また当時、論理学だけでなく、文法学 (Vyākaraṇa) や神学 (Vedānta)、祭式学 (Mīmāṃsā) や法学 (Dharmaśāstra) といった分野においても、新しい試みが行われていることが紹介された。それらの運動は、インドの伝統に従って、先行するテキストを注釈するというスタイルをとるため、既存のアイディアを超えないと思われることがしばしばあるが、そうではなく、新たな方向付けがなされ、新たな発想が産まれているのである。また、Raghunātha が活動の本拠地としたベンガルのナヴァドゥヴィーパや、ヴァラナシが、これらの新たな取り組みが行われた場所として挙げられた。

Navya-nyāya の特徴としては、(1) 確実な証拠に基づく推理、(2) カテゴリー論、(3) 新たなことばの創出の三つが挙げられた。(2) に関しては、ヴァイシュニカ学派を想起させるカテゴリー論によって、世界を樹状構造状に分析していること、(3) に関しては、サンスクリット語を記号のように用いて表現していることが紹介された。(3) についてはさらに、20 世紀の分析哲学における「言語論的転回 (linguistic turn)」との類似性が指摘された。

また、Navya-nyāya の運動が活発だった頃、インドはムスリムの支配下であり、Navya-nyāya の担い手たちがペルシャ人と交流し、また、フランスの知識人とも交流していたことが指摘された。当時、インド、ヨーロッパ、イスラーム圏それぞれの知的伝統を担っていた人たちによって、高度な国際交流が行われていたようである。

以上のように Navya-nyāya における近代性が指摘され、インドにおける近代化がヨーロッパの影響の元で行われていたのではないことが示された。近代性は、ヨーロッパにおける

近代化の幕開けを告げた Bacon や Descartes だけを起源とするのではなく、インドにおいてもその水源が見られることが確認された。最後に、さらに別の地域でも近代性が見いだされる可能性が指摘され、その分野の研究が進展することへの期待が述べられた。

【議論の概要】

桂氏からは、S. Toulmin (1922-2009) が近代化の第一段階としてルネサンスを挙げていることが指摘され、Toulmin が、Descartes 以降の近代化の第二段階に対して懐疑的な立場を取ることが紹介された。その他にも、論理学に関する問題点が取り上げられ、またフロアからはインドの政治的、社会的近代化に関するコメントもなされた。



2012 年度 第 10 回 ユニット 1 (南アジア地域班) 研究会

- 報告題目 : Buddhism, Biology, Bioethics: The Contemporary Relevance of Buddhist Reflection about the Nature of the Human Person
- 開催日時 : 2012 年 10 月 29 日 (月) 17 : 00 ~ 19 : 00
- 場所 : 龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室
- 報告者 : Jonardon GANERI (Professor in Philosophy, Department of Philosophy, University of Sussex)
- コメンテーター : 嵩 満也 (龍谷大学国際文化学部教授)
- 参加者 : 12 人

【報告のポイント】

初期の仏教聖典や Harry Frankfurt (1929-) の著作を引きながら、仏教にとっての最重要概念の一つである「無我」の現代的解釈が議論され、また生命倫理や人権といった今日の問題と「無我」との連関が指摘された。

【報告の概要】

まず、Beauchamp と Childress による *Principles of Biomedical Ethics* (1994) において提起されている、生命倫理学の四つの原理が紹介された。さらにその、「自律 (autonomy) ・ 善行 (beneficence) ・ 無危害 (non-maleficence) ・ 正義 (justice)」という原理が、イスラームにおいても適用されることが Aksoy と Tenik の “The Four Principles of Bioethics as Found in 13th Century Muslim Mawlana’s Teachings” (2002) という論考によって確認され、この四つの原理が普遍的なものであることが指摘された。報告者は、「自律」と「善行」を統合した上で、

それらの原理が初期仏教の聖典にも見られることを提示し、仏教徒の「自我」や「個人」に関する議論が、現代の生命倫理を考え直す契機となり、また「権利、尊厳、責任」という概念を再考するのに資するという点を確認した。また、「個人を尊重する」という点に関して、初期仏教と現代社会は発想を共有していることも指摘された。

さらに、Frankfurt による一体感 (identification) と疎外感 (alienation) に関する議論と、仏教の無我説との類似性が指摘され、サンユッタ・ニカーヤに記されている『無我相経』が引用された。また、Martin Adam が“*No self, no free will, no problem*” (2010) のなかで、ショーペンハウアーと仏教との類似性を指摘していることが紹介され、初期仏教のテーマが現代にも共鳴していることが示された。

報告者は「無我」を、一種の「我」の定義であると考えている。つまり、『無我相経』に見られるように、「色は我ではない、受も我ではない」というように五蘊すべてを「我ではない」と規定することによって、「そうではないもの」としての「我」を定義していると見ており、このアイディアは、仏教論理学で用いられるアポーハ論、つまり「他の排除 anyāpoha」



によって言語の指示対象を規定するという発想を想起させ、何らかのものを否定的に定義するという点で、報告者の考える「無我」とアポーハ論は軌を一にしているのである。興味深いことに、免疫学においても、このような理論が見られる。免疫学によると、最初から「私」や「私のもの」といった認識があるのではなく、体内に異物が入ってきたときに「私のものではない」という判断が生じ、その後に「私のもの」が意識されると言うのである。つまり、「自己」の認識は、「非自己」を認識して初めて生じるということであり、この生物学的なアイデンティティと、「無我」というアプローチによって規定される「我」には、類似性が見られることが指摘された。

「五蘊それぞれが無我である」という経典を理解する際に、報告者は、「色 rūpa・受 vedanā・想 saṃjñā・行 saṃskāra・識 vijñāna」という五蘊それぞれに関して、ユニークな解釈を提示している。通常、順次「matter・feeling・perception・formation・consciousness」と訳されることが多いが、報告者は「registering・appraising・stereotyping・readying・attending」という訳を当てている。これまでの理解は人間の構成要素を念頭に置いているが、報告者はそれとは違い、一連の意識のプロセスとして五蘊を捉えている。

また報告者は、初期経典において、「自我 self」には二つあることを指摘している。一つは精神状態の集合体としての「aggregate self」、もう一つは行為や認識の主体としての「agent self」である。「無我」を考える上で、否定されている「我」とは何かについて考察を深める必要性が主張された。

【議論の概要】

嵩氏からは、報告者の主張する初期仏教の自我の形態の一つである「aggregate self」についてのコメントが寄せられ、一種の精神状態に関して意見が交わされた。また同氏からは、報告者のように「無我」の考察を深めることによって、「生命とは何か」という問いに一つの答えを与えることができるのではないか、という無我説の現代的可能性が指摘された。



2012 年度 第 11 回 ユニット 1（南アジア地域班）研究会 （第 2 回ワークショップ：エンゲイジド・ブディズムの現状と展望）

■報告者・報告題目

Somboon Chumgprampree（International Network of Engaged Buddhists 事務局長）

“Activities of the International Network of Engaged Buddhists”

中村尚司（龍谷大学 人間・科学・宗教総合研究センター・研究フェロー）

“Perspective of Buddhist Economic System”

Prashant Varma（Deer Park Institute at Bodhagaya 所長）

“Revival of Buddhism in India”

Poolchawee Ruangwichatorn（Spirit in Education Movement 代表）

“Spirit in Education Movement, Thailand”

Anchelee Kurutach（Buddhist Peace Fellowship USA 理事）

“Trend of Engaged Buddhism in USA”

Sulak Sivaraksa（International Network of Engaged Buddhists 顧問）

“Future of Buddhism”

■開催日時：2012 年 11 月 12 日（月）17：00～19：00

■場所：龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室

■コメンテーター：桂 紹隆（龍谷大学文学部教授、BARC センター長）

■参加者：24 人

【報告のポイント】

BARC が継続して調査・研究をすすめているエンゲイジド・ブディズムの活動家による報告が行われた。それぞれの報告者がどのような運動を行い、それがいかに社会的な効果をもたらしているかが示され、また、エンゲイジド・ブディズムの精神的な支柱となっている Sulak Sivaraksa によって、活動の展望が提示された。

【報告の概要】

Somboon Chumgprampree は、International Network of Engaged Buddhists (INEB) の概要と、具体的活動を報告した。INEB の幅広い活動の一つとして Young Bodhisattva Project が紹介さ

れ、2007 年からインターンシップ制度を設けるなどして、若手の育成に組織として取り組んでいることが示された。また日本に関わる活動として、原発問題などについても働きかけ、平和と人権に関して積極的に発言していることも紹介された。最後に、INEB の活動に関する日本の若者の参画に対する期待が述べられた。

中村尚司は経済学者として、仏教と経済学に関する新たな見方を提示した。宗教と経済との関係を論じる際にとられる方法として、モラルの面から経済を考察することがよく行われるが、これに対して報告者は、仏教と経済を考察する際に、そのような精神的な論じ方をするのではなく、新たなシステムを提供するものとして仏教を捉えうると主張した。四法印に示されている原理である「無常」「無我」「苦」といった枠組みの中で経済を再考する「仏教経済学」の可能性が指摘された。

Prashant Varma は自らの生い立ちを述べることによって、インドにおける仏教の受容の一端を紹介した。報告者は、インドのヒンドゥー教の家庭で生まれ、大学で哲学を学んでいるときに、龍樹の教えに触れ、仏教に傾倒していった。さらに、チベットからの難民に出会い、学問的な仏教ではなく、「生きた仏教」に関心を持ち、その後、インドにおける仏教復興運動に尽力し、今日に至っている。報告者が感じている今のインド仏教の問題点は、教義的な充実が計られていないことであり、「生きた仏教」に内容が伴うことによって、仏教の活動がより盛んになるだろうという展望が語られた。

Poolchawee Ruangwichatorn はタイのエンゲイジド・ブディズムの中心的役割を果たしており、精力的に活動を行っている。ユニークな活動として、ショッピング・モールでの瞑想が紹介され、欲望をみつめる手段としてそれが有効であることが示された。また、死者の看取りを積極的に行っていることも報告され、すべての活動が仏の教え（dhamma）に基づいて行われていることが示された。

Anchelee Kurutach は Buddhist Peace Fellowship の活動を報告した。仏教を、瞑想といった静的なものというイメージで捉えるのではなく、社会的参画を積極的におこなう動的なものとして認識することによって、現代の様々な課題にアプローチしている様子が示された。健康保険、ジェンダー、菜食主義、公共交通機関などに関する社会問題は、現行の社会システムがうまく機能していないことによって引き起こされたものであり、そこに仏教の「慈悲」や「智慧」の働く可能性があることが指摘された。また、仏教が政治に関わることについても、肯定的な意見が出された。



Sulak Sivaraksa は、INEB が「平和」や「幸せ」を目指して活動をしていることを確認

した上で、それが実現し難いことを述べた。その理由として、人間が「凡夫」であることと、社会の構造が挙げられ、特に後者に関して、資本主義によって欲望を駆り立てられ、仏教でいう貪・瞋・痴の三毒が煽動されていることが指摘された。また、科学至上主義によって「私」が肥大化していることも問題視し、「謙虚さ」を忘れてはならないことが強調され、すべての生物、また自然が関連しあっているという「縁起」を心に留めておくべきだと主張された。さらに、現代の社会構造は暴力的、抑圧的であるが、それに非暴力で対抗し、また、その抑圧者を悪人にしないよう心がける必要があるとの主張がなされた。

【議論の概要】

桂氏からは、エンゲイジド・ブディズムの活動と、伝統を持った組織との関わりが質問され、各報告者からは、既成組織との交流を計りながらも、まだその関係構築が十分ではなく、模索している段階であるとの回答がなされた。また同氏からは、INEB の活動の目的が問い込まれ、報告者の一人 Somboon Chumprapree からは、それが「瞑想」の普及であるとの回答がなされ、瞑想を通じて困っている人を助け、また、活動家には瞑想の実践をすすめていることが紹介された。



2012 年度 第 12 回 ユニット 1（南アジア地域班）研究会 （第 3 回ワークショップ：スリランカにおける異宗教間対話による平和構築）

■報告者・報告題目

ジュード・ラル・フェルナンド（ダブリン大学トリニティカレッジ）

「スリランカ紛争終結後の平和構築における諸宗教間の対話」

中村尚司（龍谷大学 人間・科学・宗教総合研究センター・研究フェロー）

「スリランカにおける仏教とヒンドゥー教の対話と実践」

嵩 満也（龍谷大学国際文化学部教授）

「スリランカ平和構築における宗教間対話」

■開催日時：2012 年 11 月 29 日（木）17：00～19：00

■場所：龍谷大学大宮学舎白亜館 2 階共同研究室 1

■コメンテーター：岡本健資（龍谷大学政策学部講師）

■参加者：7 人

【報告のポイント】

三名の報告者によって、それぞれがフィールドワークで得た知見をもとに、スリランカにおいて、異宗教間での対話がいかに行われ、平和構築に向けてどのような活動が実際になされているかが示された。

【報告の概要】

スリランカ出身のジュード・ラル・フェルナンドは、多くの死者を出したスリランカ紛争の終結後に、宗教者たちがどのような活動をおこない、平和を構築したかを報告した。議論は「主権」、「平和」、そして仏教の基本教理の一つである四聖諦としての「法 (dhamma)」という三つのコンセプトを巡って展開された。いかに近代の概念である「主権」と仏教の「法」とが関連しているか、また、仏教がいかに「平和」ということに対して取り組み得るかという考察がおこなわれ、過去の遺物として、また形而上学的なものとして仏法を捉えるのではなく、現在も実践されるべきものであることが強調された。また仏教で言うところの「無畏 (abhaya)」という考え方が、現代の「平和」ということと通じていることも指摘された。

中村尚司は、紛争で親を失い、また生活難が原因で家族から離れざるをえないタミル人の子供を引き取っている仏教僧侶、カリヤーナ・ティッサの活動を紹介した。彼は、仏教の教えにのっとり、抑圧者に対して報復することを禁じ、むしろ、抑圧者の話す言語を子供たちに学ばせることを通じて、敵対している者との対話の道を開き、平和への礎を築いている。紛争地域の村で子供を育て続けているカリヤーナ・ティッサの姿が、仏教の可能性を示していることを指摘した。

嵩満也は、スリランカの NGO であるセワランカの活動を報告した。2008 年、紛争のさなかにスリランカ中の聖職者が集まり、コミュニティーレベルでの和解がはかられ、調印式が行われた。報告者自身がその調印式に臨席し、仏教、ヒンドゥー教、キリスト教カトリック、イスラーム教といった諸宗教が、対立を乗り越えて交流したという事実を目の当たりにし、草の根のところで宗教間対話の重要性を痛感させられたとの報告をした。

【議論の概要】



ジュード・ラル・フェルナンドが報告の中で用いた「ネガティブ・ピース」と「ポジティブ・ピース」という概念についての議論が行われ、前者が政治的で、「上からの平和」と呼ぶことのできるものであり、後者は「下からの平和」として、草の根の活動を指すことが確認された。スリランカの停戦は少数派を抑圧することで達成された「ネガティブ・ピース」をもたらしているが、それが根本的な紛争解決ではなく、草の根運動により構築される平和実現を目指すべきである、との指摘がなされた。そしてそのような活動が、政府や国際社会によっても支援される必要があることが強調された。



2012 年度 第 13 回 ユニット 1（南アジア地域班）研究会

■報告者・報告題目

吉田修（広島大学大学院社会科学部研究科教授）

「オリッサ州でのフィールド調査を中心に」

志賀美和子（専修大学文学部准教授）

「タミル・ナードゥ州議会・連邦下院選挙の長期的動向

——非バラモン運動再検討のための一試論」

和田一哉（東京大学大学院人文社会系研究科 次世代人文学開発センター研究員）

「インドの保健と教育——開発へのパースペクティブ」

■開催日時：2013 年 1 月 26 日（土）12：35～15：50

■場所：龍谷大学大宮学舎清風館 3 階共同研究室 1

■コメンテーター：上田知亮（人間文化研究機構地域研究推進センター研究員

龍谷大学現代インド研究センター研究員）

■参加者：10 人

【報告のポイント】

吉田報告は現在のオリッサ州の政党政治について与党 BJD（ビジュ・ジャナタ・ダル）の最近の動向から分析し、志賀報告は 1967 年の州設立時から 2009 年総選挙までのタミル・ナードゥ州の政党政治の長期的動向について検討し、和田報告は保健と教育に関する全国レベルの指標を用いてそれらが家庭内での女性の地位と相関関係にあることを明らかにした。

【報告の概要】

吉田報告は、都市部での生活実態に関する現地調査から得られたオリッサ・アイデンティティの地域的特殊性について解説したうえで、オリッサ州の与党 BJD（ビジュ・ジャナタ・ダル）が長期政権を維持している要因として、党首ビジュ・パトナイクの清廉なイメージというしばしば挙げられる要因以外についても検討する必要があることを指摘するとともに、BJD 最高幹部が離党したという最近の党内情勢が州政治に影響を与える可能性について検証した。

志賀報告は、1967 年の州設立時から 2009 年総選挙までのタミル・ナードゥ州の政党政治の長期的動向について、既成政党間の合従連衡や新党結成を詳細にフォローしたうえで、1977 年以降の州政治を牽引してきた DMK（ドラヴィダ進歩連盟）と AIADMK（全インド・アンナ・ドラヴィダ進歩連盟）の共通点と相違点、そしてその変化を、会議派や BJP（インド人民党）といった全国政党との関係や同州における反バラモン運動の伝統との関連も視野に入れながら考察し、今後の同州における政党政治の展望を示した。

和田報告は、インドにおける「全国家庭健康調査（NFHS）」から得た保健と教育に関する全国レベルの指標を用いて計量分析を行い、それらが家庭内での女性の地位と相関関係にあ

ることを明らかにし、女性の出産数や子供の健康状態を改善するためには家庭内における女性の発言力を強化することが有効である可能性が高いという政策的含意を導き出した。

【議論の概要】

吉田報告に対しては、ベンガル地方や北インドと異なるオリッサ・アイデンティティがどのような場面で顕著にみられるのかという質問が出され、食文化などの日常生活の具体例から地域アイデンティティの問題に迫る重要性が報告者から提起された。

志賀報告に対しては、反バラモン意識がタミル・ナードゥ州政治において現在果たしている役割について質問が出され、報告者からはそれが当然の前提であるがゆえに政治的争点となりにくい構造になっている可能性があるという回答された。

和田報告に対しては、結論で示された政策的含意が非常に興味深く有意義であることは認められるものの、「女性の発言力」を測る指標が不十分ではないかとの疑問が呈された。報告者からは、NFHS だけでは十分な指標を得ることが難しいため、今後は他の統計調査も用いて理論的彫琢を図りたいとの回答がなされた。



2012 年度 第 14 回 ユニット 1（南アジア地域班）研究会

- 報告題目：On Ratnākaraśānti's *Prajñāpāramitopadeśa*
- 開催日時：2013 年 2 月 15 日（金）13:15～14:45
- 場所：龍谷大学大宮学舎清風館 3 階共同研究室 1
- 報告者：羅鴻（中国蔵学研究中心副研究員、2012 年度 BARC 招聘研究員）
- コメンテーター：桂 紹隆（龍谷大学文学部教授、BARC センター長）
- 参加者：17 人

【報告のポイント】

Ratnākaraśānti の著書 *Prajñāpāramitopadeśa* の新出のサンスクリット写本をもとに、インド後期唯識思想において重要な役割を果たした Ratnākaraśānti の思想的立場について再検討がなされた。

【報告の概要】

最初に Ratnākaraśānti の生涯が紹介された。Ratnākaraśānti は、10 世紀後半から 11 世紀にかけて Vikramaśīla で活躍した、インド仏教史の最後期に位置する人物であり、彼の名に帰されている書物には、密教に関するものが多く含まれていることが指摘された。彼の教義的な位置づけに関して、波羅蜜の理趣（pāramitānaya）と真言の理趣（mantranaya）、一乗と三乗の問題、中観派と瑜伽行派の対立に対してどのような立場をとっているか、また、形

象虚偽論者 (alīkākālavādin) あるいは無形象論者 (nirākāravādin) としてどのような見解をとっているかが示された。

Ratnākaraśānti の *Prajñāpāramitopadeśa* は、瑜伽行派の立場から、究極的な智である無分別智を獲得するに至る過程を、聞・思・修の三慧を通して説いたものである。*Prajñāpāramitopadeśa* はこれまで、チベット語訳でのみ知られており、サンスクリット原本や漢訳の存在は知られていなかった。しかし、ポタラ宮よりサンスクリット写本が発見され、原典を読解する作業が可能となった。本報告は、そのサンスクリット写本によって得られた知見をもとに、これまでの *Prajñāpāramitopadeśa* 研究を修正し、Ratnākaraśānti の思想の輪郭をより明確に描き出す作業の一端を紹介するものであった。



本報告においては、主として、Ratnākaraśānti が中観派と瑜伽行派とをどのように評価し、彼自身の立場を築いているかが検討され、Ratnākaraśānti がそれぞれの学派の持つ欠点を指摘しつつ、両派を統合しようとしている様子が紹介された。また、龍樹に帰せられる詩頌に対する瑜伽行派の評価なども提示され、サンスクリット写本にもとづく考察により *Prajñāpāramitopadeśa* の研究が飛躍的に進んでいることが報告された。

【議論の概要】

桂氏からは、Ratnākaraśānti が対論者としている人物は具体的に誰かという質問がなされ、報告者からは、中観派、瑜伽行派それぞれの中から、可能性のある人物が回答された。また参加者からは、現在考えられているような「中観派／瑜伽行派」という区別が、当時も該当するかどうかを考える必要があるとのコメントがなされた。



2012 年度 第 15 回 ユニット 1 (南アジア地域班) 研究会

- 報告題目 : A Study on the Karam Festival : Popular Rituals of Oraon in Bangladesh
- 開催日時 : 2013 年 3 月 6 日 (水) 13:15~14:45
- 場所 : 龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室
- 報告者 : Shantu Barua (Lecturer, Department of Pali and Buddhist Studies, University of Dhaka)
- コメンテーター : 岡本健資 (龍谷大学政策学部講師)
- 参加者 : 11 人

【報告のポイント】

バングラデシュの Oraon という民族に伝わる Karam 祭の分析を通じて、Oraon の人々がどのようなコミュニティを形成しているかが報告された。

【報告の概要】

バングラデシュには、多数を占めるイスラーム教徒の他に、ヒンドゥー教徒、仏教徒、キリスト教徒などが暮らしており、多様な文化や宗教が共存している。その多様性にさらに彩りを加えているのが、Chakma, Marma, Rakhain, Kheyang, Lusai, Tanchanga, Chak, Oraon, Garo, Sawtal などのいくつもの小さな民族であり、彼らは主にチッタゴン丘陵地帯で生活している。

その民族の一つである Oraon は、Kurukh という名前でも知られており、バングラデシュで最も古いコミュニティの一つで、ドラヴィダ語族に分類される。Oraon の人たちは肌が黒色であり、鼻は平、髪は黒く巻毛であり、顔は丸く、中背である。Oraon は、いくつもの氏族に分かれているが、主に Bogra, Dinajpur、Naogaon 地域に住んでおり、他には Sylhet 地方



の茶農園にも暮らしている。かつて Oraon の人たちはアニミズムを信奉していたが、近年、上座部仏教に改宗を始めており、現在、彼らが元々行っていた一般的な彩りあふれる儀礼に沿った形で、上座部の宗教儀礼が行われている。

Oraon の人々は、年間を通じて様々な儀礼を行っている。彼らは伝統的な歌や踊りを今日まで伝えており、古くからの楽器も保持している。すべての社会的・宗教的な祭礼において、彼らは音楽を奏で、舞い踊るのであり、老若男女問わず、ダンスに長けている。

彼らの一般的な儀礼のなかで特に有名なのが、豊穡祈願に端を発すると考えられる Karam 祭であり、本報告においてその様子がレポートされ、詳細な検討が加えられた。

【議論の概要】

岡本氏からは、Karam 祭における仏教の影響の有無に関する質問がなされ、報告者は Karam 祭に仏教の影響は見られないと回答した。また参加者からは、Karam 祭で「神木」とされる karam 樹と、各地に広く見られる聖樹信仰や宇宙樹 *axis mundi* の観念との関連を視野に入れた研究の展開が望まれる、との指摘がなされた。

